

教 仏 名 聞

第28号
(発行日)

2013年1月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488

(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

自我からの解放

私たちはよく「我を捨てる」とか「我を離れる」とかいう。その場合の「我」とは自我のことであろう。

では自我とは何か。それは、考えて選択する機能といえましょう。

その自我と迷い心(無明)がセットになると、自我愛となり、それがいわゆる「私」の中核になってしまう。

なるほど、私たちは何十年と生きてきたなかで、ずっと変わらず一貫して続いてきた「私」なるものを常に意識している。そしてそんな「私」に深く執着し愛着し続けたのである。そういう愛着され続けてきた「私」なるもの、それが人生の「主」であり、私そのものであるとしている。

その「私」は、いつまでも健康で長生きしたい、「私」、損がいやで得が好きな「私」、人に勝ちたく負けたくない「私」、他者から認められたい「私」、人から褒められたい

「私」、人からけなされて落ち込む「私」、いわゆる都合の良いものを追い求め、都合の悪いものを排除しようとしているような「私」である。

さて仏教は、このような「自我」を立てて、それに深く愛着しているのを迷いといひ、苦と悪の元と説いて、この自我愛から解放されていく道を説くのである。

このような仏教の中で、聖道門の仏教は、直接的に自我愛を捨てていく道、いわゆる「我を捨てる」「我を離れる」道といえよう。

禅宗などでは「大死一番」とか「百尺竿頭かんとうさらに一步を進む」とか言われ、絶壁から身を投げ出すように、自分をまるごと投げ出せとか死にきれなどという。

また、上座部の仏教では、そのような愛執すべき「私」なるものはどこにも実体として存在しないという「無我観」

を盛んに説く。

たとえば、手は「私の手」であって私自身ではなく、足は「私の足」であって私自身で

はなく、心臓は「私の心臓」であって私自身ではない。この肉体の中に実体的な「私」を認めることはできない。ではいったいどこに私があるのか。心の中か。しかし心は常に流れている想念の連続以外にはないので、そこにも実体的な固定的な「私」は認められない。「私」とは、念々変化しつつ連続している意識の流れに「私」というレッテルを貼はっているに過ぎない、などと内観していく。

そういう内観や瞑想を徹底し、あるべき生き方を実現しようとして、聖道門の仏教では出家し、修行に励むのである。

しかし出家して仏門に入り、厳しい修行によって自ら

自我愛を捨てる道は、一般人には容易につけていけない。

それに対して私たち浄土門の教えは、普通の生活の中で念仏聞法し、私たちの自我は煩惱の塊であることを教えられ、すなわち煩惱的自我は貪欲と瞋しん恚を核としている。ああなりたい、こうなりたいと自分の都合の良いものをむさぼり、都合の悪いことにあると怒り、はらだち、憎み怨む。自分の勝手な考えを主張し、高ぶり、いつわり、へつらい、かざり、ねたみ、怠け、真理を疑い誘そうするような代物、それが「私」である、と知らされていく。

しかもそのような自我心をいかにしても離れることも浄化することもできぬ私。私は、「我が身が可愛い」という自我愛の塊であって、清浄な心、真実の心は一つもない。煩惱熾盛の助からぬ身、生ける屍であると、教えによって照ら

謹賀新年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

土井紀明 土井眞由美

中村穂積 迫田忠夫

宮野勲 中川政二

平成二十五年元旦

し出される。

しかもその様な愚悪の者に、はからずも（我がマルマル引き受けて罪を除き仏にする。そのままなりで我にまかせよ）と南無阿弥陀仏となつて、私の口に称え現れ、喚んで下さっている阿弥陀仏の大悲の思し召しを聞く。

私の側は自我の塊（かたまり）である自分に困り果てている。ところがそんな私に対して（そんなお前だから我に任せよ）と仰せ下さる弥陀の大悲の仰せ。そこに自ずから、私（自我）を引き渡さざるを得なくなり、お任せせずにはおれなくなる。

卑近（ひきん）なたとえでいうと、大きな生ゴミの袋が沢山でき、これを家の中に置いておけば悪臭（あくにお）でも耐えられない。かといって道に放り出すわけにいかず、川に勝手に捨てるわけにいかず、隣りの庭にほうりこむこともできず、困り果てているところに、大きなトラックが来て（すべて買い取り、豚の餌にするからどうか全部売って下さい）と呼んでくれたら、一も二もない、（どうぞどうぞ）と生ゴミをすべて引き渡す。そのようなものである。

（私はまったく値打ち無し）と、（私）を見限り、同時に、（そのまま助ける）と仰せ下さる弥陀に自我をおのずと引き渡す。

その時、自我を超えた如来が私の（主体、あるじ）となり、自我は客となる。自我は捨てられぬまま、おのずから自我中心から如来中心に軸足（じくあし）が移行する、移行が始まるのである。

そうすると、自我を（捨てよ）（自我を離れよ）と言われても到底離れ得ぬ者が、（我に価値なし、我を助けたもう南無阿弥陀仏します）と聞くところに、自我は捨てられぬまま、おのずと自我を見限り、自我を如来に引き渡す。こうして、自我から解放される道が開かれてくるのである。

自我を捨てたり、自我を離れられぬまま、そんな者にかけて下さっている弥陀大悲の南無阿弥陀仏に身をゆだねしめられて、自我からおのずと解放されていくのが浄土仏教の教えなのである。

（了）

正信偈に学ぶ問答

（四十九）

善導独明仏正意
矜哀定散与逆悪
光明名号顕因縁

（書き下し）善導独り、仏の正意（しょうい）を明かせり。定散（じょうさん）と逆悪（ぎやくあく）を矜哀（けうあい）して、光明名号、因縁（いんえん）を顕す。

（現代語訳）善導大師はただ独り、これまでの誤った説を正して仏の教えの真意を明らかにされた。善悪のすべての人を哀れんで、光明と名号が縁となり因となってお救いくださると示された。

*

N 「善導大師はいつの時代の人ですか」

D 「大師は中国の唐の時代（六一三〜六八二）に活躍した浄土教の祖師で真宗の七高僧の一人です」

N 「ここで（独り仏の正意を明かせり）といわれたのはなぜですか」

D 「その当時の中国の仏教界には多くの高僧が出られた中で、ただ善導大師だけが、観

無量寿経に説かれた釈尊の説法の正しいお心を明らかにされたといわれるのです。この意義の重大さをさらに考えますと、善導大師は当時の仏教界のみならず、それまでの仏教の教えの流れの中で善導大師こそ仏教の言わんとする正しい思し召しを明確にされた、という程の意味も含まれているとうかがいます。それ

までの仏教で、善導大師ほど一切衆生が助かる道を明示されたお方は居なかつたというお心が入っていると思えます。それで日本の法然聖人は（私は善導一師に依る）とま

で言われたのです」
N 「それほど真宗にとって善導大師は大事なお方なのですね」
D 「ええ、真宗は善導大師から始まるという見方もできるほどです。それで聖人は『浄土文類聚鈔』に

善導、独り仏の正意に明らかなり、深く本願に藉（よ）つて真宗を興（おこ）す。

と仰せになり、大師は真宗を興（おこ）したのだと仰るのです」

N 「なぜそれほどまで聖人は仰るのでしょうか」
D 「それは善導大師が出て、一切衆生が平等に助かる道がはつきりしたからです。勿論、一番初めは釈尊の経説です。その釈尊の経説の中で、一切衆生が仏になれる道を最初に見定めたのは善導大師なのです」

N 「どのように見定めたのですか」
D 「大師は、衆生が仏となるのは浄土に生まれることによつてであり、浄土に生まれる道を説かれた大経と観経と小経の中で、観経の思し召しによつて大経の四十八の本願、ことに第十八願を解釈されたのです。そしてその解釈によつていかなる人も救われる法を明らかにされたのです」

N 「第十八願を解釈されることによつて、一切衆生が浄土に往生できる道（助かる道）が開かれたのですね。それはどのような解釈ですか」
D 「大経によると、法蔵菩薩は一切衆生を仏にしてやりたいと願われ、五劫という長い間思案されて、一切衆生の助

間思案されて、一切衆生の助

かる道を見出し、これを発表

されました。それが四十八願

です。この中の第十八願は衆

生を浄土に往生せしめて仏に

なしたもう願です。そして法

蔵菩薩は四十八願を実現する

ために永劫の御修行を為され

て願を成就し、阿弥陀仏にな

られ、浄土は完成し、浄土に

生まれる法は出来上がったと

説かれています。そこで衆生

を浄土に生まれさせようと誓

われたのが第十八願ですが、

それは

たとい我、仏を得んに、十

方衆生、心を至し信樂して

我が国に生まれんと欲うて、

乃至十念せん、もし生まれず

は、正覚を取らじ。唯五逆と

D 「ええそうです」

N 「どのような解釈ですか」

D 「それは大経の十八願とそ

の成就を次のように読まれた

のです。

もし我成仏せんに、十方の衆

生、我が名号を称せん、下十声

に至るまで、もし生まれずは正

覚を取らじと。

かの仏、いま現にましまして

成仏したまえり。当に知るべ

し。本誓重願虚しからず、衆生

称念すれば必ず往生を得。

と。この解釈を古来、本願加

減の文といっています」

N 「この加減の文の意味をお

話し下さい」

D 「へもし我成仏せんに」と

いうのは法蔵菩薩は御自身が

下十声に至るまで」すなわち

（下は十声ばかりも口に名号

を称えるばかりで助ける」と

表現されたのです」

N 「口先で南無阿弥陀仏とた

だ十声なりとも称えるばかり

で、というのは人間に何も条

件をつけず、まるまる助ける

という大悲を表されたのです

ね」

D 「ええそうです。それは私

たちの心や人間性や行為や持

ち物など、一切私に条件をつ

けない、生まれつきの今のま

まをそのまま引き受けて浄土

に至らしめよう、との誓いで

す」

N 「なぜ私たちの側に、私た

ちの心に、一切何も要求され

ないのですか」

D 「それは法蔵菩薩は、私た

ちの心には真実がないと見ら

れたからです」

N 「そういう真実のない衆生

を平等にすべて救いたいとい

う大悲のお心をここに表され

たのですね」

D 「ええ、私たちに、欲を捨

てよとも、怒りを離れよとも

へつらうなとも、施しをせよ

とも、懺悔をせよとも、感謝

をせよとも、真面目に励めよ

とも、奉仕活動をせよとも、

疑いをはらせとも、信心を発

せよとも、一切問わないとい

う思し召しを（我が名号を称

せん、下十声に至るまで、も

し生まれずは正覚を取らじ」と

と表されたのです。」

N 「へかの仏、いま現にまし

まして成仏したまえり」とは」

D 「そのように一切衆生を平

等に浄土に往生させようと誓

って法蔵菩薩は長い真実の修

行・六波羅蜜の修行を一々の

衆生に代わってなされ、その

修行によって一切衆生をまる

まる助けることのできる仏に

成られた、と大経に説かれて

いる、そのことです」

N 「では、へまさに知るべし、

本誓重願虚しからず、衆生称

念すれば必ず往生を得」とは」

D 「法蔵菩薩は修行しすでに

成仏しておられる、だから法

蔵菩薩の誓願は虚しくない。

一切衆生を阿弥陀仏の大悲の

力一つで助ける功德を成就し

ておられる。だからへまさに

知るべし」で、お念仏を申す

人は必ず浄土に生まれると

（知りなさい）、と仰せられ

るのです」

N 「へ知る」とは」

D 「阿弥陀仏が私をまるまる

助けて下さることをお聞かせ

いただく、その仰せをその

通りに（知る）、すなわち信

知することです」

N 「その通りに（知る」とは」

D 「阿弥陀仏が（そのままた

りで助ける」と聞いて、（こ

のまま助けて下さる」と聞い

ていることにほかなりませ

木村無相さんの法信 8

(昭和五十七年六月十二日付けの木村無相さんから私へのお手紙)

六月十二日(土) 暁五時。和上苑の自室にて。無相

さて、昨日まで、ナニを書いたか読みかえず、気力も、時間もないので、昨日までは昨日までのこと、今日は今日なりのことを書かせてもらいます。改めて読んで下さい。

お手紙に

二河警を見ますと既此の道あり、必ずまきに渡るべし」と三定死の現実の状況になおおむしる此の道を尋ねて前に行かん」といわれている限り、三定死の現実には全く道がとざされていっていることではないと思います。

三定死のごころはなお一つの道がすでにあることを善導様はいっておられて、無道道なしと仰つておられないのは大切なことではないかと思っております。

とあるが、まづ大切なことは、

「三定死」の境地にはまったく道がない、どうしようもない、のだということをしたたかに、味わい知ることが大切中の大切だと思います。はじめから道があるものなら、「三定死」とはいわないでしょう。「三定死」の我が身と気づけばどうしようもない。「我れ」としては、どうしようも無い。「我れ」としては生死出離については絶望のホカないことを、

十二分に
知ること
が大切
で、安易
に、「こ
こに道あ
り」と思

つてはイケナイと思うことです。「我れ」としては、まったくどうしようも無い、まったく道なし」ということをよくよく味わう時に、はからずも、「道あり、この道を往け」の仰せを聞くのです。

「我れ」としては全然道がない、「凡夫」としてはまったく道がない。そこに、「この道を渡るべし」は「如来法蔵」様の方からのことです。「我れ」としては、全然道がない、絶対絶命のその「我れ」に「如来」が道をつけたもうてこそ、「道あり」ということになるので、「我れ」としては、「道なし」と知ることが、とても大切なことであります。

「我れ」としては、まったく道なし」ソレが「機の深信」
「如来が道をつけたもう」
コレが「法の深信」

「我れ」としては、未来永劫に出離の道あることなしということが大切。ここがハッキリしないと、「ここに道あり」との法がいただけくない。
徹底して「我れに道なし」ということが思い知られることが大切。

無道道なしとはおしやていない。
がそれは

無道の私において、はからずも与えられた道なので、我としてはまったく、思いもかけぬことなのである。

「我れとしては、全然道なし」ということが、ハッキリしないから、ただアマでそう思うという程度だから、今既に、「道あり」と知らされても、それがいただけなくて、白道に踏み込めないのである。

さて、それはそれとして、今朝は別の方から聞いてもらいましょう。

「我れとしては道がない」にしる、「まったく無道ではない」にしる、スデに、道は、あたえられているのである。「信前」も「信後」も無い。「三定死」もクソもない。既に「道」はあたえられているのである。

それは、「信」にしる「不信にしる」オタガイには、スデニ、念佛があたえられているのである。オタガイはスデに、早くから、ともかくも、声に、口に、ナムアマダブツと申すことは、チグレチグレにしる、申しているのである。この「称名念佛」こそが、スデに、「道」があり、与えられている「白道」なのです。

この念佛、この称名念佛のホカに、別に「白道」というものがあるのではない。オタガイは、スデに、生死出離の道として、「白道」、念佛をあたえられているのである。

今、既に、スデに、お念佛は申すのであり申されるのであり、申しているのである。

このお念佛が、即ち白道なのである。このスデに与えられている、称名念佛という「白道」のホカに、「白道」を、救いの道を、考える、求める、探すところにマチガイがあるのである。

「帰命とは、本願招喚の勅命なり」と聖人がおっしゃってくださっているが、ナムアマダブツ、お念佛のホカに、本願招喚の勅命のホカに、「白道」はない。われわれの口に、声にナムアマダブツと申される、申されている、このお念佛のホかに「白道」はない。だから、聖人は帰命とは本願招喚の勅命なりと仰せ下さっているのである。

白道とは本願招喚の勅命のホカなく、ただ念佛のホカにはないのである。その「白道」を今、現に、信にしる、不信にしる、三定死であるにしる、無いにしる、オタガイは、スデに、この濁悪の口に、ナムアマダブツナムアマダブツといただいているのである。

(続く)

平成25年度御年忌年回表

1周忌	平成24年亡
3回忌	平成23年亡
7回忌	平成21年亡
13回忌	平成19年亡
17回忌	平成13年亡
23回忌	平成9年亡
27回忌	昭和62年亡
33回忌	昭和56年亡
37回忌	昭和50年亡

(23回忌と27回忌をせずに25回忌にいとむ数え方もあります。また50回忌以後は50年ごとになります)